



昭和二十三年
六日町伊勢町



今朝は
ずいぶんと楽
なのよ



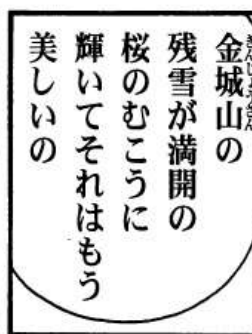
お母さん
具合は
どうですか？



そう……
よかった



コックリ



金城山の
残雪が満開の
桜のむこうに
輝いてそれはもう
美しいの



朝食を
済ませたら
少し散歩に
行きましょう



それまで
私は
もうひと仕事！

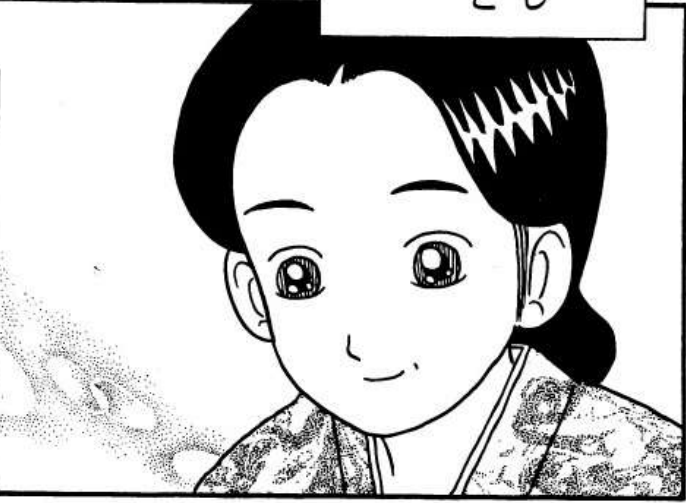
さっ



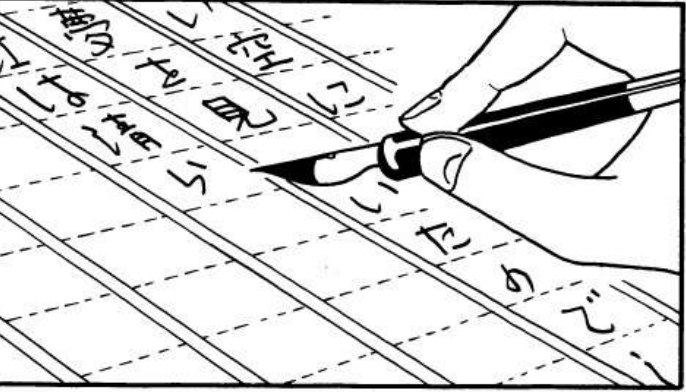
『私は小さい頃
雑誌や小説を読んだり
大小いろいろのノートに
手あたりまかせにいろいろな
小説みたいなものを
書きつけたりして、一人で
喜んでおりました』

久遠の夢
水島あやめ

そして、何でも、
大きくなったら、素晴らし
い、偉い小説家になろうと
考えていたのです。』
少女倶楽部より



『そのころ読んだ本の中で
心を打たれた数々の物語は
今でも、ハッキリと思い出されます。
それほど、少女時代の感激は
強く鋭く、その人の一生を
通じての、生活や思想にまで
つながりを持つものであることを
私は深く感じています。』



水島あやめ物語 夢を追いつづけて

それ故^{ゆえ}
よい少女小説を書きたい。
感じやすくやわらかな
少女の心を健やかに^{すこ}
美しく育ててゆくような
少女小説を書きたい。
とは――

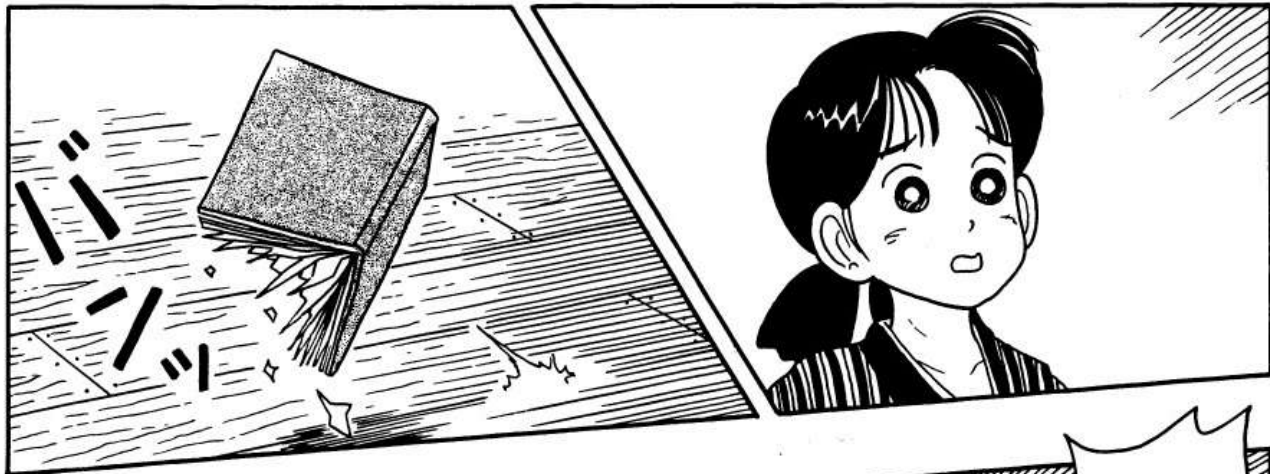
今の私の
何よりの願
いなのです』

「櫻咲く田」(壮年社)
はつがきよの



大正四年
六日町大月

『私が憧れていた
「学校」は楽しいどころか
全くひどい幻滅と
悩みの場所であった。』



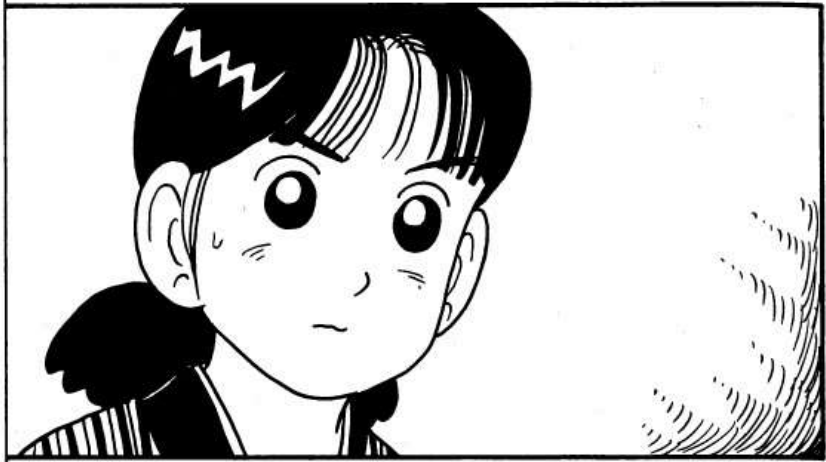
やい
ちとせ
千年!!

女のくせに
本なんか読む
んじゃねえ!!

そんな暇
があつたら
ボロ雑巾でも
縫つてりやいいがだ!!



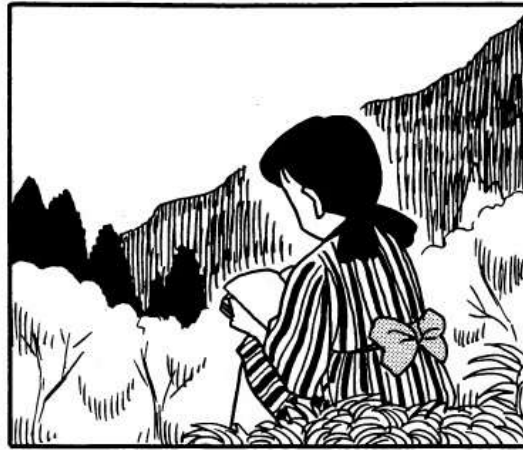
『入学当初から、
まずたつたひとりの
おさげ髪だったことから
「チャンチャン坊主」という
男生徒のからかいから
始まって――』



上級になるごとに
悪質ないじめ方を
されるようになり
授業中の他はいつでもどこから
石が飛んで来るか、いつも
突き飛ばされるか、いつも
戦々恐々として心の安まる
時はなかった。』



『しかし、意地っばりの
私は、どんなことを
されてもけっして泣かな
かった。
冷然として
その男子生徒たちを
見つめていたので、
それが
余計彼等を
いらだたせたので
あろう。』



とにかく
いじめられ通しの
六年間だった。』
「閉校記念・大月おおづき小学校」
より



お前のことは
みんな知っている
よ

学校で
ひどいいじめに
あっていることや

家ではお前と
病弱な母親が
二人の異母兄の前
で肩身のせまい思
いをしている
こともな

つらいことが
あったら
いつでもここへ
おいで

留守がちな
父親に代わって
お前を優しく
包んであげるからね

この魚沼の
大自然は
みんなお前の
味方なんだよ

強く生きるん
だよ
千年!!



……
ありがとう

きんじょうさん
金城山



『私の故郷は、
越後の山の中だ。
私はその山の中で
物心ついてから、少女時代の
十幾年間を
朝に山を見、夕べに
山を見て暮らしたのだ。』

山はなつかしい私の
幼な友達だ。
母のふところ次に次ぐ
甘いかぐわしい揺りかごだ。
そして再び帰ることのない
幼い夢のしまい場所だ。』

すいひつ
随筆「山をおもふ」より



* 舎監…寄宿舎(寮)を監督する人。

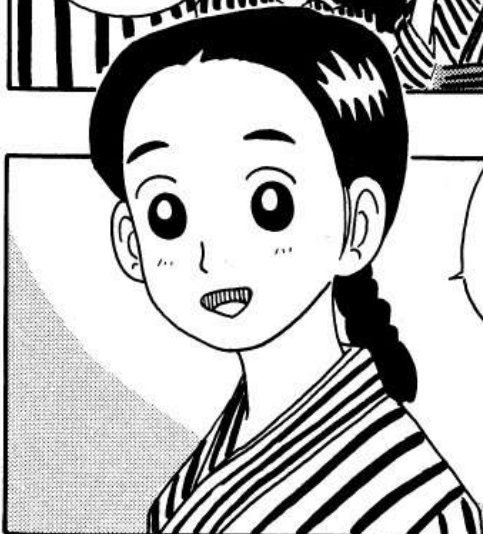
大正八年
長岡高等女学校



高野さん！
高野千年さん

* しゃかん
舎監の
先生が
お呼びよ

はい



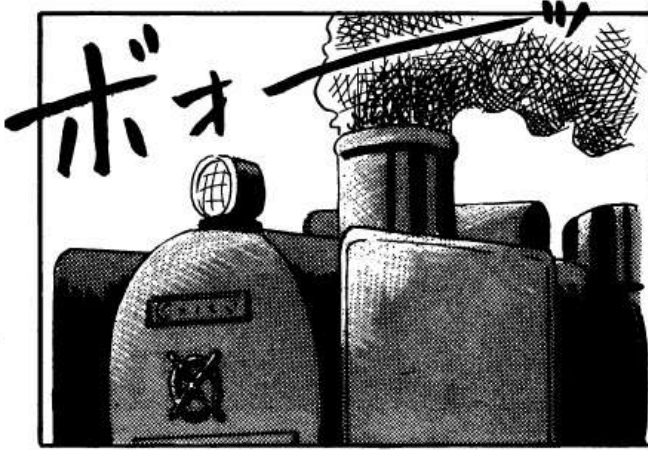


『家の近くには
女学校がなかったので
私は女学校時代はずっと
長岡高女で寄宿生活を
送りました。』
「長岡高等女学校
同窓会会報」より



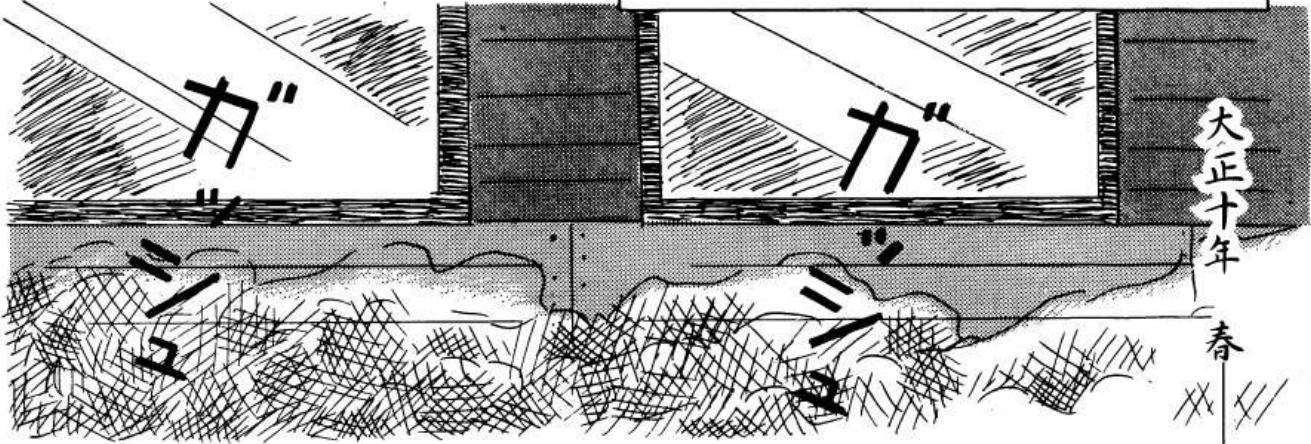
『当時は生徒に
小説類は一切禁止
の規則でした。しかし
読書欲の人一倍強かった
私は、とても我まんできず
それはいろんな本を
読んだものです。』
「長岡高等女学校
同窓会会報」より





『舎監長の森田先生は時々、私に苦笑しながら「高野は読書家だねえ。しかし、まあいいよ。」と言って私のわがままを許して下さいました。とてもうれしかったものです。』

長岡大手高校
創立八十周年記念誌
「八十年のあゆみ」より





父・団之助

『私が初めて東京に出たのは
大正十年の三月末、長岡の
女学校を卒業してすぐで、
東京から迎えに来てくれた
父に連れられて朝六時の
汽車で長岡を発ち、信越線
まわりでやっと上野に着いた
のは夕方五時ころだった。』

魚沼新報

「今昔の感」より



ガッシュー

ガッシュー

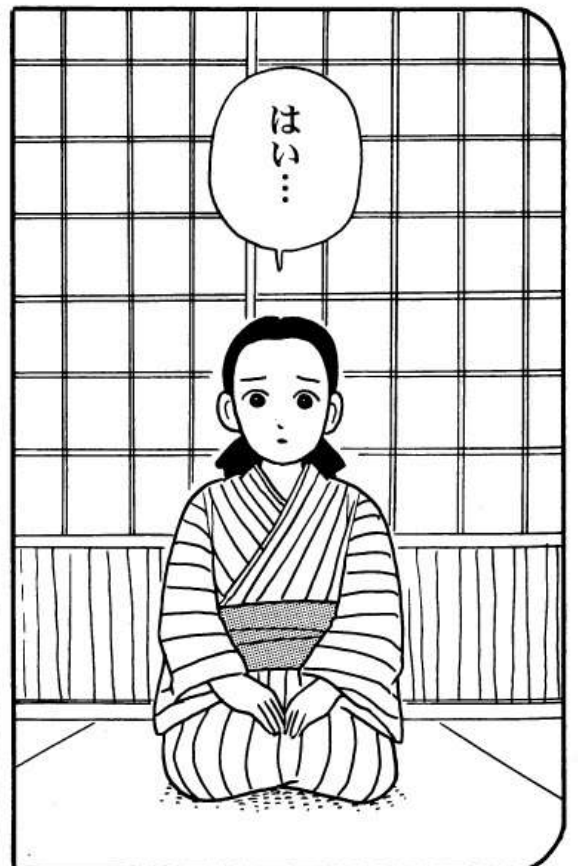
なんだとー!!

東京の大学へ
進みてーだと

!?

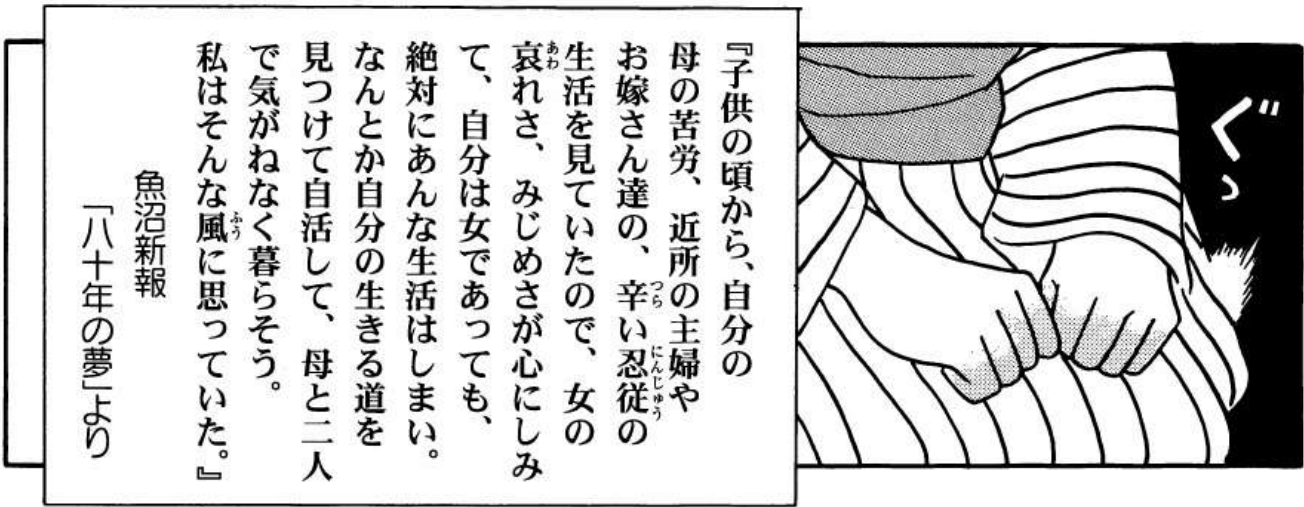


女のくせに
なに
言ってるんだ!!



はい…

*高等科…戦前の小学校課程。
尋常科6年の義務教育の後、希望者が2年間学んだ。



待って
ください

私からも
お願いしま
す!!

どうか
千年の希望を
かなえて
やってください!!

お願いしま
す!!

お母さん…

ガッシュー
ガッシュー

東京ではな
職業婦人が
増えているんだよ
千年

え……?

大正デモクラシー
といって髪形や
服装も洋風に
なってきた

これからは
女性ももっと
社会に出なくて
はならないし、
活躍できる
時代になる

そのつもりで
精進しなさい

はい……

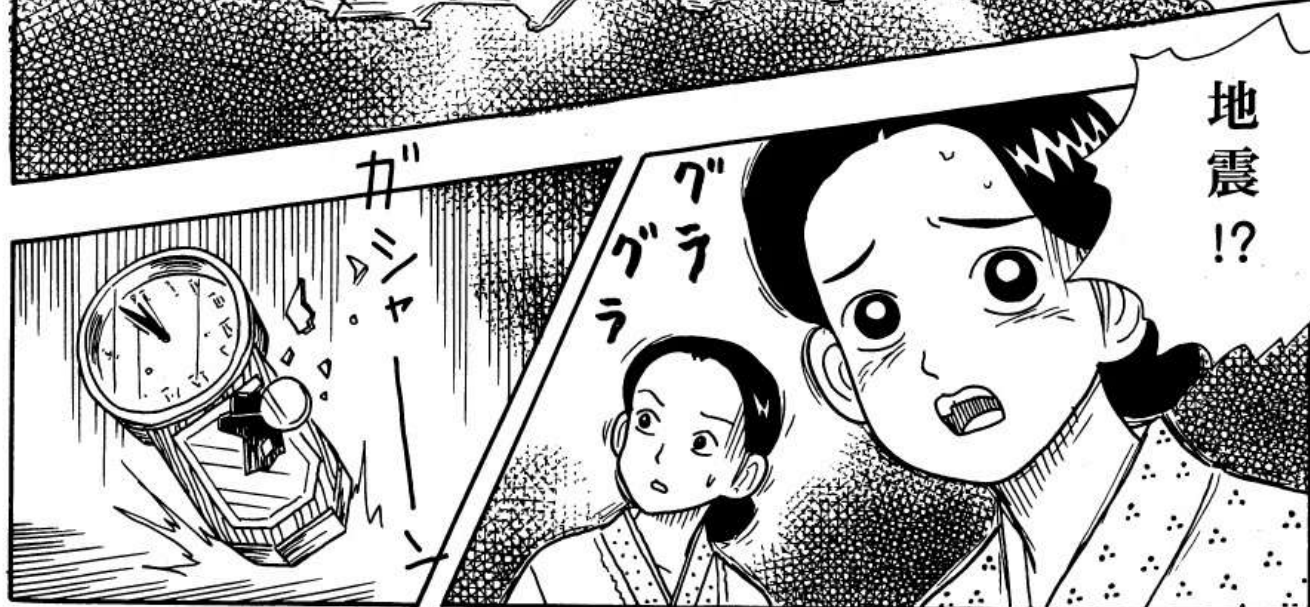
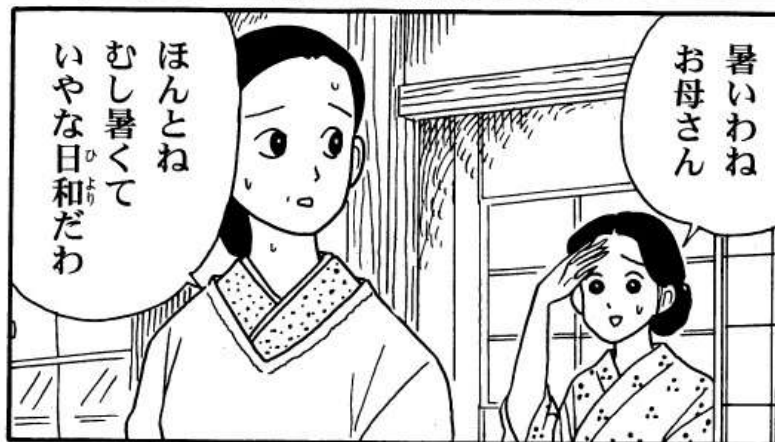
ポオ

ガッシュー
ガッシュー



『四月から目白^{めじろ}の女子大学へ
通学するようになり、六月には
母が上京してくれたので
学校の近くに小さな家を
借りて母子で暮らすようにな
った。』

魚沼新報「今昔の感」より



マグニチュード7.8を超える激しい揺れで、東京は火の海となり、関東地方一帯で14万人もの死者、行方不明者を出した。



『その時、耳にはなにも聞こえませんでした。目も無意識に梁のあたりを見つめたまま、ただひたすらに救いを神に祈りました』

ただ恐ろしかった、自然の力が本当に恐ろしかった。』

「長岡高等女学校
同窓会会報」より



ひどいもの
だわ……



町の様子は
どうだい？



一ヶ月後

ただいま



夫を亡くした
女性が路頭に迷う
姿が多くみられた
わ……

すぎるものを
失って打ちひしがれる
様子はあまりに
痛々しかった……



私は……
私はたとえ
女であつても一人で
生きてゆく強さを
持ちたい



大学を卒業したら
自立の道を見つけて
母を養つて暮らして
ゆきたい

いやー
おもしろかった

いい映画
だったわね



そうだわ、映画の脚本
なら、小説家になりた
いという小さい頃から
の夢にも近い……



映画……

『自分で選んだ道なら
どんな苦労でも
やり甲斐があるのではないか。
私はそんな風に思つて
今から考えれば若気の至り
というか若さの無鉄砲と
いうか、その頃、まだ女の
人などふみこんだこともない
映画脚本の世界に飛び込ん
で、シナリオライターへの道を
歩きはじめたのだった。』

魚沼新報「八十年の夢」



シナリオを
勉強してみよう

大正十三年 春

小笠原プロダクション



ずいぶんと
うまくなった
ね高野くん

ありがとう
ございます

『(大学四年になったばかりの頃)
小笠原プロダクションに入り、
シナリオのイロハから学んだ』
アルバム「思い出の切抜き集」
より



本当です
か!?



このシナリオを
今度の映画に使お
うじゃないか



あなた
私のクラスの
高野さんってご存知
でしょう?

『五十年前の日本女子大は
すごく規律がやかましく
二、三年の下級生の人が
ちよつと新劇の舞台に立つた
ら、ウムをいわず退学処分。
今の沢村貞子がそうだ。
まして映画のシナリオ書き
などがバレようものなら
絶対助かりっこない。
あわてて思いついたのが
「水島あやめ」のペンネーム。』
新潟日報「わたしの生家」
より



ええあの
おとなしい方
でしょう

今話題の
「水兵の母」は
高野さんが脚色
なすったんですって



まあ素敵!!
水島あやめって
高野さんでしたの!?

卒業なすったら
すぐ蒲田の
脚本部へお入り
になるそうよ

大正十四年 春
松竹キネマ蒲田撮影所



『大正から昭和のはじめ、
今からは想像もできないほど
男女差別がひどく、女の
書いたシナリオなど、
はじめから見向きもしない
監督さんが多かった。』

魚沼新報「八十年の夢」
より



女が…この世界で生きてゆくことなどしよせん無理な話だったのだ

くしや



いくら書いても映画にしてもらえなければ脚本の意味など無い

『あの「おしん」の作者の*^{はだ}橋田さんも、同じ女子大の出身で、やはり一時期松竹キネマの脚本部へ入られたそうだが「あんなみじめな思いをしたことはなかった」とある記事の談話で書いておられたから、かなり後でも同じことだったらしい。』
よ
魚沼新報「八十年の夢」

*橋田…橋田寿賀子。テレビの脚本などで活躍中。

大正十四年
十二月

松竹蒲田撮影所所長
城戸四郎



次の映画の脚本に君の作品が選ばれたんだよ



話というのは他でもないんだ実は……



先日公募した脚本だよ一般の作品も含めて三千余編の中からの一等賞だ

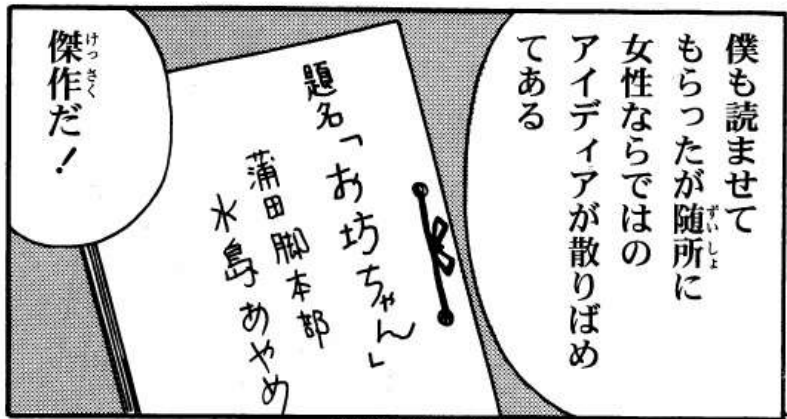
私の……私の脚本が採用されるなんて……



え……



あ……
ありがとうございます
ございます



傑作だ！

僕も読ませて
もらったが随所に
女性ならではの
アイディアが散りばめ
てある



映画館に足を
運んでくれる
ファンは
年々女性が多く
なっている

これからは
女性脚本家の
役割も重要に
なるはずだ
大いに期待してい
るよ



はい！！

『城戸さんは、
映画を作る主体は
監督であり、脚本家である
という近代的な考えに
立ち、それまでの役者中心
の映画作りをやめて、
監督・脚本家を
映画創造の中心に据えた。
数々の名監督・名脚本家
が城戸さんの指導のもと
に誕生した。』

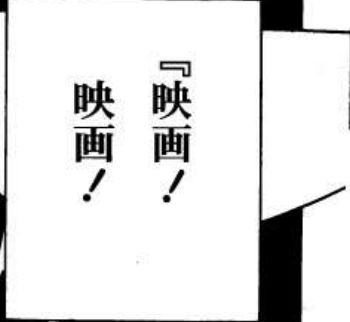
映画監督 山田洋次



ただ今
満席となっております
おります！！

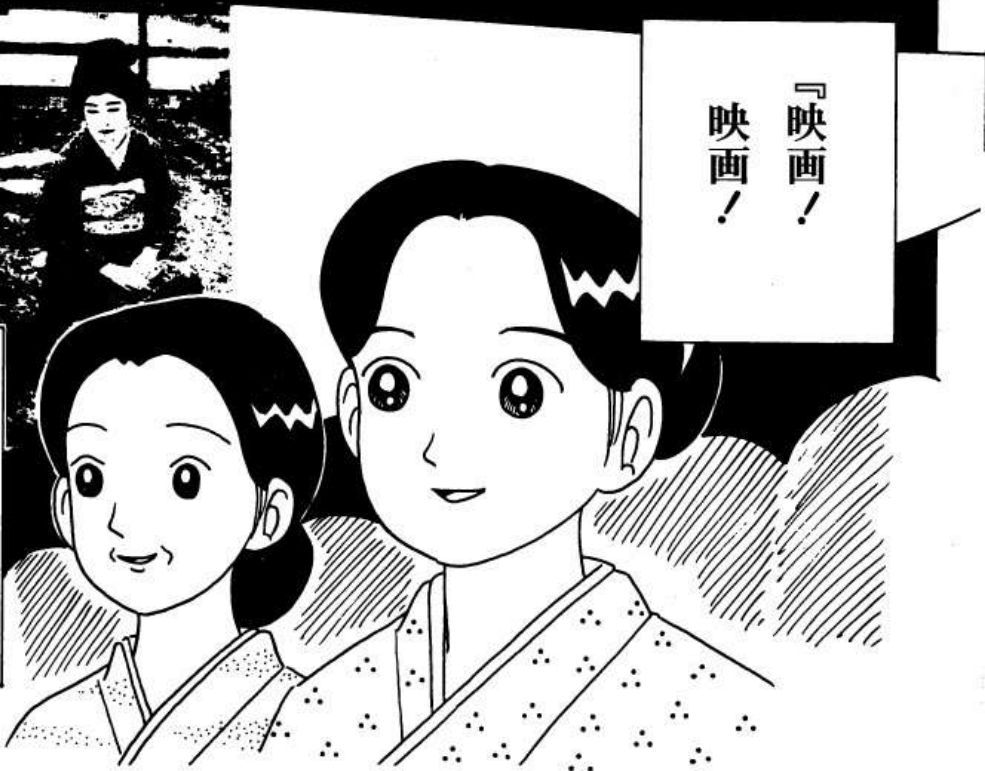
次の上映は
四時半から
です！！

原作 水島あやめ
お坊ちゃん
監督 山田洋次



私は全生命を
映画の為に
捧げよう

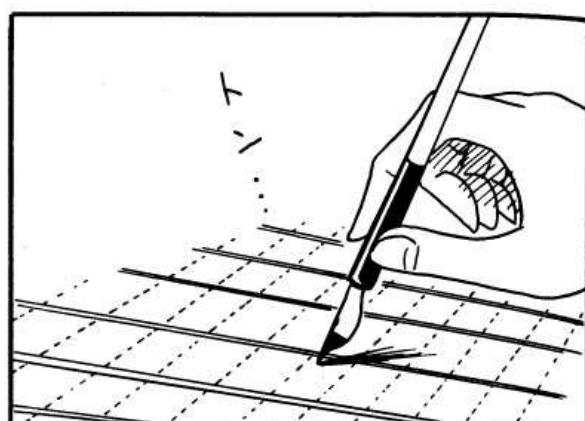
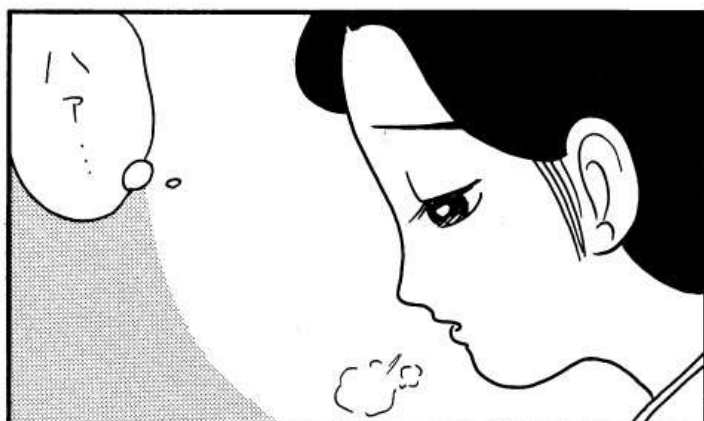
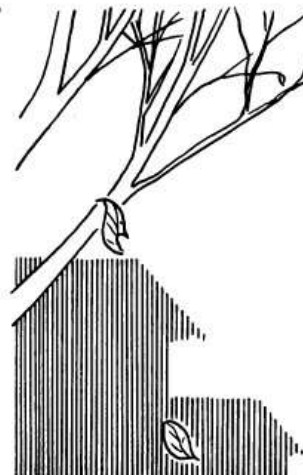
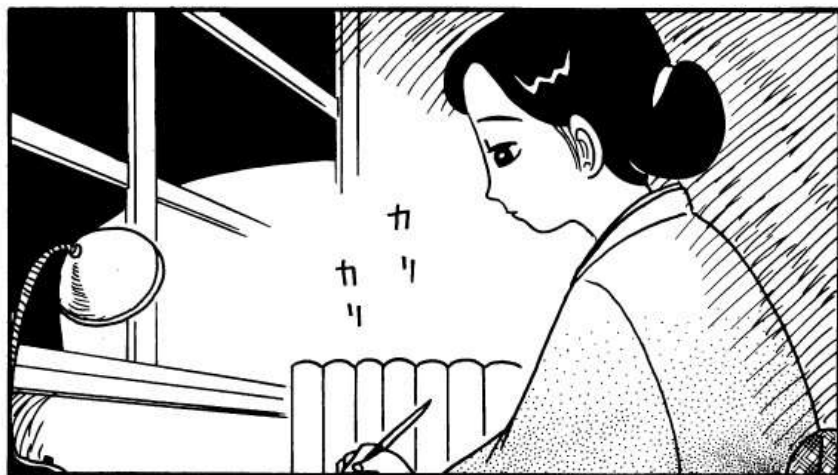
「長岡高等女学校
同窓会会報」より





『高野さんは蒲田で十四、五人もいるという脚本部でただ一人の婦人としてなくてはならぬ人。世の多くのファンはスタアとしての栗島すみ子や川田芳子と同様、水島あやめさんを知らぬ者はなからう。学生時代のおとなしい高野千年さんと今の水島あやめさんを同一人として結びつけるには何だか余りにかけ離れた感じがしないでもない。』

昭和十年



『私は学校を出て
 すぐその日から自分で働いて
 生活して行かなければならな
 かった。
 それ故、ついその時その時を
 間に合わせて行くのに
 忙しくてそれがいつしか
 全部の仕事になって
 しまっていた。
 ゴマカシで仕事をして
 行く……なんて、何という
 みじめな事であろう。
 時折それに気がついて
 ハッと反省してみることは
 あっても、明日の仕事を
 目の前に控えていては
 今更いまさらどうにもならないと
 ただ溜息ためいきをついて
 あきらめてしまう。』

日本女子大学機関紙
 「家庭週報」より

このままで
 いいのだろうか
 ……





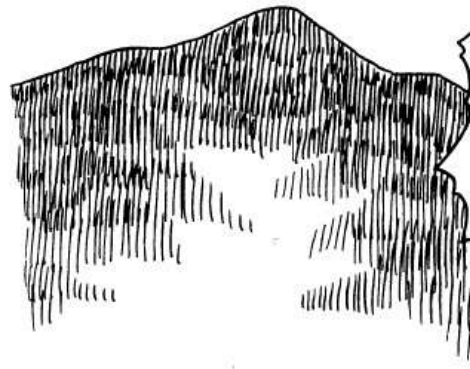
どうして
そんなに切ない
顔をしている
のだ？



千年……



お前の作品は
こんなに大勢の
人を喜ばせて
いるのに



きんじょうさん
金城山！！



脚本の仕事は
とてもやりがい
があります
でも……

私が本当に
やりたい仕事は
他にあるのです



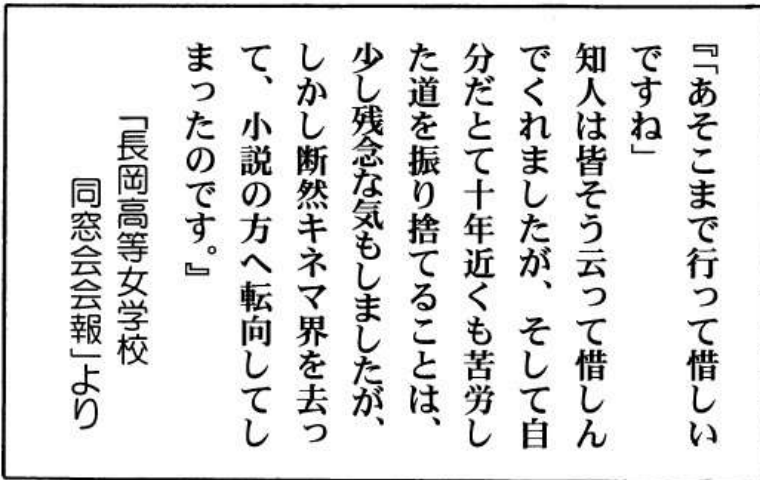
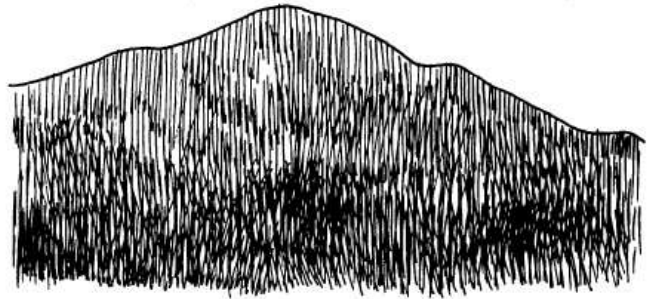
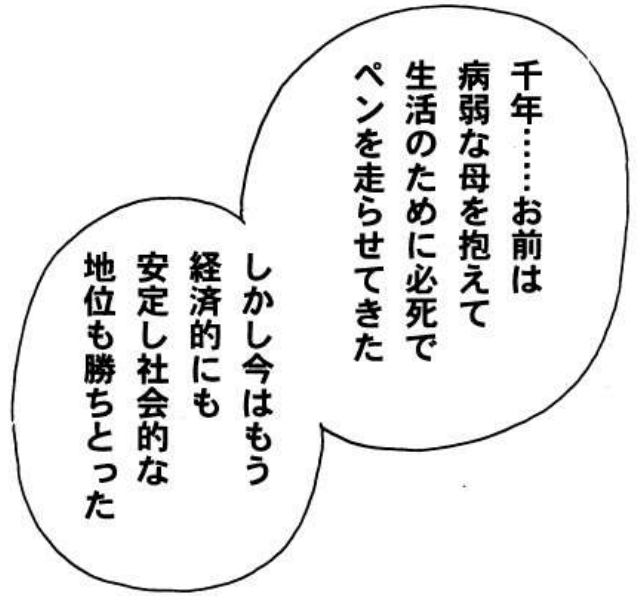
幼い頃の私が
いろんな物語に
なぐさめられ
励まされたように

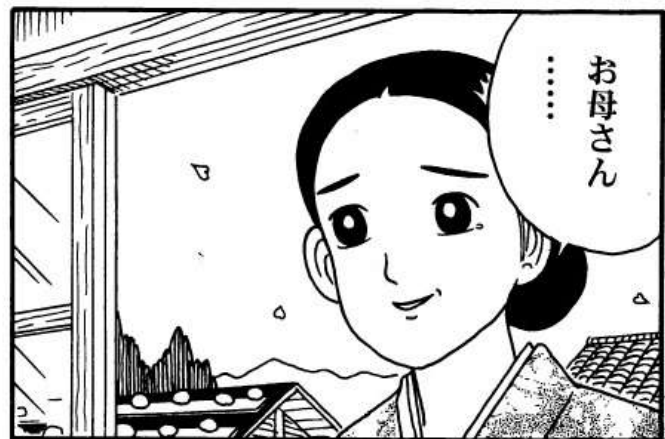
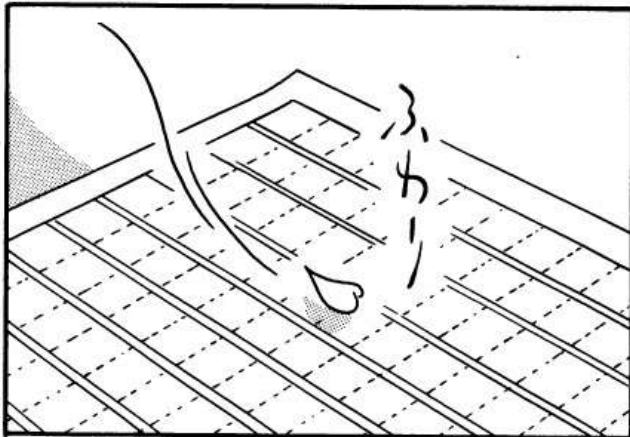
今の子供たちに
夢や希望を
与えることが
できたらと……



児童小説を
書きたいのだね

はい！！





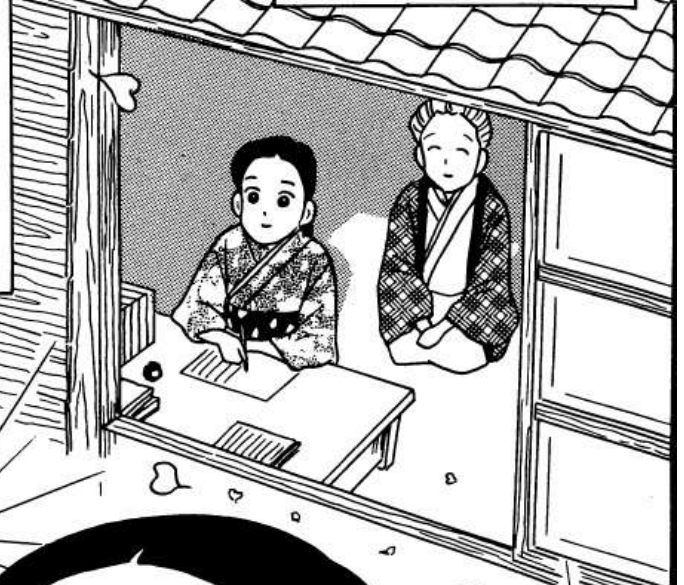
風に運ばれる
この桜の花びらのよ
うに

どうか一人でも
多くの子供たちの
元へ千年の
願いが届きます
ように……



『私どもは、どんな不自由な不幸な身の上でも、自分の心一つで、いたるところに美しいよろこびの花を見つけてことができます』

さびしい人をなぐさめてあげるよろこび、困っている人に親切にしてあげるよろこび、自分の仕事を忠実になしとげるよろこび――



どうか皆さんも、自分の身のまわりに、そういう美しいよろこびの花を、たくさん見つけてください。そして、皆さんが、そのよろこびの花を方々へまいてくださるならやがては世の中全体がよろこびの花でうずまり明るくたのしいところとなるでしょう』



昭和二十四年四月発行
『家なき少女』(偕成社)
『この物語』(こいしん)より

日本で最初の女流映画脚本家・少女小説作家

みずしま

水島あやめ

才能を活かし、自立した女性の本当の「夢」とは



執筆中のあやめさん（大正15年・23歳の頃）

■水島あやめさんという女性

水島あやめさんを簡潔に紹介するならば、つぎの二つが挙げられます。

- 一、昭和初期のサイレント（無声）映画の黄金期に活躍した、日本で最初の女性脚本家。
- 二、昭和初期から三十年代にかけて数多くの物語を著し、全国の少女たちに夢を与えた少女小説作家。

このような輝かしい活躍をした彼女は、故郷・六日町の自然を愛し、小説や随筆の中で誇りと愛情をもって雪国の素晴らしさを紹介した人であり、また、大正から昭和初期というまだ女性の社会的な立場が弱かった時代に、ペン一本で自立し、病弱なお母さんを生涯守りとおした女性でした。

■生い立ち

水島あやめさんは本名を高野千年ちとせといい、明治三十六年七月十七日、父団之助だんのすけ（雅号隆雅がこうりゅうが）と母サキの一人娘として、現在の六日町大字大月（當時は三和村）で生まれました。高野家は「旦那さま」の一軒で、あやめさんが生まれたとき、お父さんは三和村の村長でした。

彼女の育った家庭環境は、すこし複雑でした。実は母サキさんは、父隆雅さんの三番目の奥さんでした。ですから、あやめさんには年の離れた腹違いの二人のお兄さんがいたのです。この異母兄たちとお母さんと

の間には、さまざまな確執かくしつがあったようです。

そんな環境の中ででしたが、あやめさんはお母さんの深い愛情を受けて成長します。小学校時代には、その頃まだめずらしかった「おさげ髪」だったこともあって、よくいじめられました。しかし、どんなにひどいいじめを受けても、けっして先生や親に告げ口をしないで毅然きぜんとしていたので、それが氣にくわないと、さらにひどいいじめを受けたといえます。

あやめさんはまた、何よりも読書が好きで少女でした。芸術家で教育熱心なお父さんと、実家が書店だったお母さんから、たくさんの本や雑誌をあたえられ、物語の世界に夢をふくらませていました。本から得た影響は大きく、やがて「大きくなったら、素晴らしい偉い小説家になろう」という「夢」を抱きます。

大月小学校を卒業した彼女は、長岡高等女学校を経て、大正十年に上京し日本女子大学に入学します。

■「夢」に向かって

大学に入った彼女は、本格的に小説を書きはじめます。そして三年生の時に、歴史小説「形見の絵姿かたみ えすがた」が雑誌「面白クラブおもしろクラブ」の懸賞に入選して掲載されます。さらに、四年生になると、「小笠原プロダクション」に入って映画のシナリオの勉強を始めます。この頃には、物語かシナリオを書くことで身を立てようと決意していたようです。そして、何作か書いた習作しゅうさくの中から「水兵の母」という脚本が映画化されることになりました。この映画の完成を間近にして、大学で一つの事件が起こります。



映画「母よ恋し」の1シーン（写真提供 高野典夫氏）

下級生の沢村貞子さんが新劇の舞台に立ったという理由で退学になったのです。それを聞いて、あわてて考えたのが「水島あやめ」というペンネームでした。こうして公開された映画「水兵の母」（大正十四年三月五日封切り）こそが、日本ではじめて女性が脚本を書いた映画作品だったのです。

では、あやめさんはなぜこんな危険をおかしてまでシナリオの勉強に

励んだのでしょうか。このように言っています。「子供のころから、自分の母の苦勞、近所の主婦やお嫁さんたちの、つらい忍従の生活を見ていたので、女の哀れさ、みじめさが、心にしみて、自分は女であっても、絶対にあんな生活はしまい。なんとか自分で生きる道を見つけて自活して、母と二人で気がねなくくらそう。」（『八十年の夢』より）

こうした決意には、次のような時代的な背景がありました。彼女が生まれ育ったころはまだ、家族の生活の苦しさを助けるために多くの若い女性が女工に出され、家に残った女性も朝早くから夜遅くまで働きづめの毎日を送っていました。ところが、上京して大学生活を送ったころの東京は大正デモクラシーの時代を迎えており、また女性解放運動の機運が高まっていて、さまざまな分野で職業婦人がいきいきと働きはじめていました。こうした時代にあつてあやめさんは、異母兄たちと折り合いの悪かったお母さんを新潟からひきとり、小さな借家で二人で暮しながら、将来自立する道を考えて、在学中から努力し準備していたのです。

■日本映画の父・城戸四郎の生涯

大学を卒業したあやめさんは、松竹キネマの蒲田撮影所脚本部に入社します。そこで、彼女の生涯に大きな影響を与える人物と出会います。当時蒲田撮影所の所長だった城戸四郎です。彼は、小津安二郎や成瀬巳喜男、木下恵介、篠田正浩など日本の映画史に名を残す才能を世に送り出し、また映画監督の山田洋次が「日本映画の父」と讃え尊敬する人です。その城戸が、男性だけの映画製作の世界で、「女である」というだけで

相手にされないあやめさんをかばい、自分のもとに置いて一人前の脚本家に育て上げます。松竹キネマに入社して最初に書いた脚本「お坊ちゃん」

<上映された映画作品>

大正14年＝「水兵の母」「極楽島の女王」
大正15年＝「お坊ちゃん」「母よ恋し」「いとしの我子」
「曲馬団の少女」「愚かなる母」「我れは海の子」
昭和2年＝「恋愛混戦」「木曾心中」「孤児」「天使の罪」
昭和3年＝「故郷の空」「鉄の処女」「神への道」「空の彼方へ」
「妻君廃業」「をとめ心」「美しき朋輩たち」
昭和4年＝「明け行く空」「親」
昭和5年＝「現代奥様気質」「純情」「モダン奥様」
昭和6年＝「美しき愛」「暴風雨の薔薇」
昭和7年＝「青空に泣く」「輝け日本の女性」
昭和8年＝「女人哀楽」
昭和10年＝「接吻十字路」「輝け少年日本」

も、彼のプロデューズによるもので、三千点あまりの公募作品の中から一等に選ばれて映画化（大正十五年五月一日封切り）されました。その頃人気絶頂だった男優諸口十九を主演に、松竹キネマ所属の俳優を総出演させて制作されたこの映画は、たいへんな評判になります。

しかし、映画「お坊ちゃん」の成功は、あくまでも城戸所長の敷いてくれたレールに乗って実現したものでした。あやめさんは、この与えられたチャンスを自分の努力で我がままにします。次の作品「母よ恋し」は、原作・脚本の両方を彼女が書きましたが、この映画もまた大ヒットします。

■日本で最初のプロの女流脚本家として活躍

映画「お坊ちゃん」と「母よ恋し」の二作の成功のあと、あやめさん

の書く脚本は次々に映画化されるようになります。おりしも時代は大正デモクラシーの最盛期をむかえ、街は華やかな活気であふれていました。カフェやダンスホールが数多く開店し、白いエプロン姿の女給やバスの車掌、百貨店のエレベーターガール、看護婦など「職業婦人」と呼ばれる女性が多くなっていました。また、断髪したモダンガールと呼ばれる新しい女性や、長髪にロイドのメガネをかけたモダンボーイたちが、街を闊歩していました。

このような開放的な時代にあつて、映画はもつとも人気のあつた大衆的娯楽でした。あやめさんは、この花形の世界における女性の先駆者として、数多くの映画作品を書き、プロの女流脚本家として活躍したのです。

彼女が原作または脚本を書いて上映された映画は、全部で三十一本でした。こうして彼女は、ペン一本で社会的な地位



あやめさんの著わした少女小説（高野隆太郎氏所蔵）

を確立し、また経済的にも自立して、病弱なお母さんを養いながら暮らしをたてられるだけになったのでした。

■児童小説作家への転身

昭和十年、映画がサイレント（無声）からトーキー（有聲）に変わり、また撮影所が蒲田から大船に移転するなどの大きな転機を迎えたことをきっかけに、あやめさんは松竹キネマを退社し、幼いころからの「夢」

＜発刊された主な単行本＞

- 昭和15年＝『小公女』（講談社）
昭和16年＝『友情の小径』（文昭社）、
『櫻咲く日』（壮年社）
昭和18年＝『美しき道』（壮年社）
昭和22年＝『アルプスの山の少女』（文化書院）、
『キュリー夫人』（講談社）
昭和23年＝『愛の翼』『秋風の曲』（妙義出版）、
『久遠の夢』『白菊散りぬ』（偕成社）
昭和24年＝『乙女椿』『形見の舞扇』
『あこがれの星』（ポプラ社）、
『嘆きの花嫁人形』（妙義出版）
『母への花束』『家なき少女』（偕成社）、
『愛の花々』（雲雀社）、『小公女』（講談社）
昭和25年＝『アルプスの少女』（講談社）
昭和26年＝『家なき娘』（講談社）
昭和27年＝『忘れじの丘』（ポプラ社）
昭和28年＝『涙の円舞曲』『野菊の唄』（ポプラ社）
昭和29年＝『乙女の小径』（偕成社）、『花の友情』（ポプラ社）、
『嘆きの子鳩』（偕成社）
昭和30年＝『秋草の道』（ポプラ社）、
『アルプスの少女』（偕成社）
昭和47年＝『金城山のふもとで—私のわらべうた—』（上村印刷所）

だった作家として新しい人生を歩む道を選びます。

松竹キネマに勤めているころから、少女雑誌等にとまどき物語を書いていたのですが、退職を機に作家活動に専念します。当初は『少女倶楽部』などに、主に少女小説や名婦物語を書いていましたが、昭和十五年に講談社から『小公女』（訳本）が、翌十六年に『友情の小径』（文昭社）と『櫻咲く日』（壮年社）が出版されて以後、昭和三十年までにおよそ三十冊が単行本として刊行され、また約二百編の短編が雑誌等に掲載されます。これらの中で昭和二十年から三十年までに発刊された作品は、故郷・六日町の伊勢町の家で執筆されたものです。物語を書くようになった動機を、あやめさんは次のように書いています。

「少女時代の感激というものは、強く鋭く、その感じは、しらすらずの間に、その人の一生を通じての、生活や思想にまでつながりを持つものであることを、私は、自分自身の経験からも、深く感じています。それ故、よい少女小説を書きたい、感じやすく、やわらかな少女の心を、健やかに美しく育てて行くような少女小説を書きたい、とは、いまの私の何よりの願いなのです。」（『櫻咲く日』のはしがきより）あやめさんは、物語のもつ役割の重要性を自分の少女時代の体験から深くわかっていただけでなく、その物語を自分で書いて全国の少女たちに届けたいという「夢」を抱きつづけ、それを実現したのでした。

■故郷への思い

日本で最初の女流脚本家として、また売れっ子の少女小説作家として活躍するかたわらで、あやめさんは雑誌や新聞、小説などに、機会ある

ごとに生まれ育った故郷・六日町の自然の素晴らしさを自慢たつぷりに紹介しています。こうした故郷讃美は、晩年に著した回想録「金城山のふもとでー私のわらべうたー」（上村印刷所）にまとめられます。この著書は、彼女の少女時代の思い出を、自然の移り変わりや年中行事とともに四季を通じて描いたもので、上越新幹線や関越自動車道はもちろん清水トンネルさえまだ通っていない時代の、雪国の暮らしぶりや風土を知る上で貴重な文献といえます。

■ほんまの「夢」の実現

このように水島あやめさんは、自立した女性の先駆者の一人として数々のすばらしい足跡を残して、平成二年の大晦日おおみそかに、八十七年の生涯を閉じます。

彼女は八十歳のとき、自らの生涯しょうがいをふりかえり、次のように述懐しています。「母とくらしただのしい日々、その母を、とにもかくにも自分の力で、生涯を無事に守ってあげた……という思いだけが、いつまでも私の老いの心を、あたためている」（『八十年の夢』より）と。満足感で、おだやかな晩年を過ごしたことがわかります。

彼女の生涯の真の「夢」は、脚本家（シナリオライター）になることや作家として成功すること以上に、自分の手で「お母さんの生涯を無事守り通してあげること」だったのです。それを実現するために、まだ女性おんなが誰一人踏み込んだことのない男性中心の映画製作の世界に乗り込んだのでした。そして、さまざまな差別や偏見へんけんを乗り越えて女流シナリオ

ライターとして成功し、経済的な自立を果たした上で、作家になりたいという自らの「夢」を実現したのです。



病弱な母とあやめさん（写真提供 高野典夫のりお氏）

■才能を育てる環境と支援

あやめさんの成功は、彼女自身のすぐれた才能と人一倍の努力によって成し遂げられたことは言うまでもありません。しかし、そのほかにもいくつかの条件があったことも見逃すことはできません。

その一つが、彼女の育った環境です。まず、お母さんの実家が本屋で、大好きな本をたくさん読むことができ、雪深い里にいながらにして広い世界にふれることができました。物語の中には、自分と同じようにつら

く恵まれない境遇きょうぐうにあっても、明るく頑張っている少年や少女がたくさんいたのです。また、お父さんも芸術活動で東京はじめ全国各地を歩くなかで、時代の流れや最新の情報を得て、少女あやめさんに接していたことでしょう。大学時代に女性解放運動が盛んになっていたり、大正デモクラシーという時代的な背景もまた、大切な要素だったといえます。

そして、もう一つ重要なことは、彼女がよき理解者と援助者に出会い、支えられたということです。まず、彼女が四年間大学で学ぶために、故郷で田畑を守りながら送金をつづけてくれた腹違いのお兄さんたちの存在です。さらには、松竹キネマ蒲田撮影所の城戸四郎所長の先見せんけんの明と力強い導きが挙げられます。あやめさん自身が、後年「大正から昭和のはじめ、いや、戦前といってもいいが、今からは想像もできないほど、男女差別がひどく、女の書いたシナリオなど、はじめから見向きもしない監督さんが多かった」といい、「私の蒲田時代は、まだ『男尊女卑』の時代で、『女のくせに』とか、『女なんて』とか、いつも差別の眼で見られ、とても辛つらかった」と語っています。その彼女を、城戸所長が「慈父ひ」のように、陰になり日向ひなたになって、励まし育ててくれたのです。

水島あやめさんという女性の大成たいせには、つらく厳しい現実に負けない彼女自身の強い気持ち、すなわち「夢」をもっていたことと周囲の人々の理解と支えの両面があって、実現できたといっても過言ではないと思われまます。

(文責 因幡純雄いんぱんじゅんお)